

古くて新しいおふくろの味

松本侑壬子・ジャーナリスト

森進一がヒット曲「おふくろさん」を歌うことを禁じられたという。作詞家との間の齟齬が原因とのことだが、大の男同士の只ならぬ^{いさか}争いが母の愛を歌った歌を封印する(?)、というのが何とも皮肉というかしらけるというか。切々と歌い上げる母の愛は、争いごととは逆の教えを含んでいるはずではないのか、と。

しかし「おふくろ」という言葉に代表される息子の母への思いは、いっぺんに男の気持をつなぐ、古くて新しい魔法の言葉だ。もっとも、九州・小倉地方では別の呼び名もあって、「ボクが一番大切な人。ボクのために自分の人生を生きてくれた人」のことを「オカン」とこの映画では呼んでいる。

原作のリリー・フランキーの自伝(2006年度「本屋大賞」受賞)は200万部のベストセラー。これを“若干マザコン”を自称する劇作家、演出家の松尾スズキが脚本化、松岡監督が映画化した。

1960年代、故郷の小倉でボクが3歳のころ親子3人が暮らした短くも幸せな日々の思い出。オトン(小林薫)は酔っ払いの遊び人、オカン(内田也哉子)はそんな夫に愛想を尽かしてボクを連れて故郷の筑豊の実家に戻り、小料理屋で働きながらボクを育ててくれた。無口だが賢く毅然とした若い母親像を“新人女優”の内田が清清しく演じている。

1980年代、憧れの東京に出て美大生になったボク(オダギリジョー)は、学校へも行かず絵も描かず、だらだらと自堕落な生活を送り留年。そんなボクを母(樹木希林)は叱りもせず、「あと1年、オカンも頑張るけん、あんたもしっかり学校に行き

なさい」と励ましてくれた。オカン役の樹木は内田と実の母娘で演じ分けている。ふんわりと母性愛に満ちた素朴な優しい母親像だ。

1990年代、バブルがはじけ借金返済のためにがむしゃらに働くうちに、ボクはイラストレーター兼コラムニストとして自活できるようになっていた。故郷ではガンで手術し、退院したが完治せぬままにまだ働こうとしていたオカンを、ボクは東京に呼び寄せた。15年ぶりの母子二人暮らしにボクは初めて幸せを実感する。母は家伝の糠床を持参しており、自慢の手料理はボクの友人らを喜ばせた。笑い声に包まれた温かな我が家。だが、怖れていた日は、確実に近づいていた…。東京タワーの麓の病院に入院した母に寄り添って、最後の日々を過ごすボク。オダギリジョーのやるせないまなざしは、観る側の母性本能を微妙にくすぐる。母親は、女として、生活人として、人間として多面体の存在ではあるが、その一番甘い部分にたっぴりと包まれたとろけるような幸福感を知る息子の哀歓—そんなまなざしである。遅ればせながら、別れたオトンが見舞いにやってくるが、所詮愛の勝者は息子であり、父親を見る目つきはむしろ憐れみである。

原作者、脚本家、監督と3人そろって40代の男盛り。「これは僕自身の話」というオダギリジョーを加えて、これは臆面もない男たちの母恋いの歌だ。『醜の母』から新藤兼人の『落葉樹』まで、日本映画に脈々と伝わる“おふくろの味”。こちらには争いはなく、見事な男声合唱である。



日本映画(142分)／松岡錠司監督

『東京タワー オカンとボクと、時々、オトン』

全国松竹系にて公開

